

2021. 10 のブログ：ヴィゴツキーの「発達最近接領域」について、の詳細 (2110Vygotsky)
(→ <http://www.1968start.com/M/blog/index2.html#2110>)

ヴィゴツキーの「発達最近接領域」について

中所武司

■このブログのきっかけ

2021. 10. 2 の朝日の記事

https://digital.asahi.com/articles/DA3S15062892.html?iref=pc_ss_date_article

「(古典百名山+plus:110) ヴィゴツキー『思考と言語』 大澤真幸が読む」の書評に
「■能力、他者との関係で理解」という見出しを付け、「**発達最近接領域**」という概念が
紹介されている。

<内容>

- ・1896年に、20世紀の心理学で偉大な業績を遺したスイスのジャン・ピアジェとロシアのレフ・ヴィゴツキー(1896~1934)が生まれた。
- ・ピアジェは、子供の思考が、感覚運動段階から形式的操作段階までの4ステップで発達すると見る理論で知られている。
- ・ヴィゴツキーは、ピアジェのよきライバルで、ヴィゴツキーの死の直後に刊行された彼の主著『思考と言語』は、ピアジェ批判にかなりの頁を使っている。
- ・ヴィゴツキーの着想をよく示すのは、「**発達最近接領域**」という概念である。
二人の子供にテストを受けさせ、ともに知能年齢が八歳だと判定されたとする。
次に大人が少し手助けしてやると、子供たちは八歳より高いレベルの問題が解ける。
が、成績は同じではない。一方の子は九歳レベルで精いっぱいだったが、
他方の子は十二歳の問題を解けた。
他者の補助によって今日できることは、明日には一人でできるようになる。
明日の発達水準(九歳と十二歳)と現下の発達水準(八歳)の差で定義されるのが、
最近接領域である。
- ・この概念は、人間が何かを「為(な)しうる」とはどういうことを考えさせる。
最近接領域にあることは、「(私に)できないこと」に分類してよいのか。
「私にできること／できないこと」の二項しかなければ、そう判定されるが、
これだと、あの二人の子供の能力の違いを記述できない。
- ・**発達最近接領域**という概念は、次のような理解を示唆している。
今のところ他者に(半分)担われているという形式で、私に属している能力がある、と。
つまり他者性(援助者)と未来性(明日)を帯びた、私の能力というものがあるのだ。
このように心理現象を自他関係の中で理解するのがヴィゴツキーの特徴。
- ・本書では、ピアジェが独我論的思考の残滓(ざんし)と見た子供の「自己中心的言語」
(独り言の一種)でさえ、他者が共にいることに触発されて発生することが示される。

ヴィゴツキーの『思考と言語』は、私の修士論文（1971）の最も重要な参考文献だった。
私の修論では、子供の自己中心的言語が内言（思考言語）に発展するという視点に着目したが、この書評の「**発達**の**最近接領域**」に興味を抱き、『思考と言語』の関連部分を読んでみた。

■ ヴィゴツキーに関する私の過去のブログ

（注）★印のブログは、「**発達**の**最近接領域**」に言及している

2021.7 「思考の外在的行為化の場としての仮想空間」を読んで

<http://www.1968start.com/M/blog/index2.html#2107>

2018.10 幼児の自己中心言語と内言の関係

<http://www.1968start.com/M/blog/index.html#1810b>

2018.5★ 解説「子どものコモンセンス知識」でヴィゴツキーが引用されている

<http://www.1968start.com/M/blog/index.html#1805c>

2015.8★ なつかしのヴィゴツキーが人工知学会誌の学習に関する論文で引用されている

<http://www.1968start.com/M/blog/old.html#1508b>

2014.7★ なつかしのヴィゴツキーが汎用人工知能A G Iで注目されている

<http://www.1968start.com/M/blog/old.html#1407>

2008.3 40年近く前に読んだヴィゴツキーの「思考と言語」が注目されているらしい

<http://www.1968start.com/M/blog/old.html#0803c>

■ 「思考と言語」の中での「**発達**の**最近接領域**」言及部分

（文献）ヴィゴツキー 著、柴田義松 訳：新訳版・思考と言語、新読書社

（2001.9.26 初版1刷）471頁、本体3800円+税

（1971年の私の修論での参考文献は、明治図書、1962年発行の「思考と言語」上下）

<http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/shuuron.htm>

（注）以下、→★の部分：私のコメント

本文の【第六章 子どもにおける科学的概念の**発達**の研究】の中の、

【三 **発達**と教授との相互関係】の中の、

【4 **発達**の**最近接領域** p.297～p.304】及び【5 総括 p.304～307】について：

<抜粋>

・子どもの**発達**状態の評価方法について

＊子供が自主的に解いた問題から、成熟した機能を評価するだけでは不十分

＊成熟しつつある機能、すなわち、**発達**の**最近接領域**を考慮すべき

・**発達**の**最近接領域**の説明

八歳の子供が、自主的に解けない問題について、 教示、誘導質問、解答のヒントを与えたとき
十二歳の子供が自主的に解く問題が解ける子どもと

九歳の子供が自主的に解く問題まで解ける子どもがいるので、

この知能年齢の相違が、子どもの**発達**の**最近接領域**を決定する。

→★従来の知能指数（精神年齢 ÷ 生活年齢 × 100）の概念に近いかも。

12 歳／8 歳＝150、9 歳／8 歳＝112.5、のような数値化が可能なので。

・模倣について

- *古い心理学や常識では、模倣を純粹に機械的な活動とみて、誰にでもできることなので、発達状態を特徴づけることはできないとする。
- *現代の心理学では、子どもは、自分の知能の可能な領域内にあるもののみを模倣できるとする。
 - （例）将棋を知らない者は、棋士に教えられても模倣はできない
 - （例）算数を知っていれば、複雑な問題の解法を教えられて、それを応用できる
 - （例）高等数学を知らなければ、微分方程式の解法を教えられても利用できない
- *子どもが一人でできることから、共同でなしえることへの移行の可能性の大小は、子どもの発達を特徴づけるきわめて鋭敏な特徴である。（**発達**の**最近接領域**そのもの）
- *ケーラーのチンパンジーの実験では、模倣はその知的能力により厳密に限定される。猿は、調教により、複雑な操作を教えることができるが、理解しているのではなく、技能として機械的に行われている。
- *比較心理学では、理解に基づく模倣と、自動的（機械的）な模写を区別する。模倣は反復を必要とせず、調教（模写）は試行錯誤（反復）により習得される。
- *教授-学習は人間に固有なもので、動物には一般に無理。

→★ここでの模倣とは、教えられたことを理解して、類似の問題にも応用できること
今日の教育の多くは、これに該当する。

・子供について

- *学習心理学の重要課題は、模倣（教授-学習）によって、子どもが、できることからできないことへ移行する可能性である。（**発達**の**最近接領域**の概念内容）
- *ことばの教授、学校における教授は、ほとんど模倣に基づく。
- *ある年齢のある段階で、**発達**の**最近接領域**にあるものは、次の段階で、現下の発達水準に移行する。共同で今日できることは、明日には一人でできる。
- *子どもへの教授は、発達を先回りし、発達を促すのが正しい。
- *子どもの教授は、子どもがすでに学習できることについてのみ可能なので、すでに経過した発達サイクルである教授の下限に注目すべき。
- *教授は、成熟した機能より、成熟しつつある機能（**発達**の**最近接領域**）に基づくべき。したがって、学校の教科は、未成熟の土台に基づく。

→★本章の「科学的概念の発達」に関して、学校の授業は、今日できないことを教えて、明日には独力でできるようにしている、という意味では、当たり前のことと思われる。

・心理学的研究からの教育学的結論に関する原則的問題

- *以前は、子どもが読み方や算数などの教授を受けるまでに成長したか否かが問われた。これは教授の下限を決めるのに有効。
- *さらに上限を決める必要あり。この上限と下限の間でのみ、教授の効果がある。

*教育学は、子どもの発達の前日ではなく、明日に目を向けなければならない。

→★初級、中級、上級のようなクラス分けがあった場合、「下限」のレベルにより、参加するクラスが決まり、そのクラスの受講により「上限」に達するということか。

・簡単な例：当時（20世紀初期？）のロシアの総合教育について

- *子どもが自分の思考で、独力でなしえることに目を向け、できることからできないことへの移行の可能性（**発達の最近接領域**）を考慮しなかった。
- *すでに成熟した果実だけから評価する庭師のように、発達状態を評価した。
- *最も抵抗の少ない線を目指し、子どもの強さではなく、弱さに目を向けた。

→★学校で行われる試験・テストは、「発達状態の評価」にあたるが、問題ないと思う。
ロシアの総合教育の具体的な内容が不明だが、上記文章から推測すると、
クラスの最低点（下限値）の引き上げを重要視したということかな。

→★できることからできないことへの移行の可能性（**発達の最近接領域**）に関しては、
個人差があるので、能力別クラス編成が必要となる。（次の総括に関連記述あり）

【5 総括 p.304～p.307】

<抜粋>

- ・教授と発達は、直接には一致せず、極めて複雑な相互関係の中にある二つの過程である。
- ・教授は、それが発達の前を進むときにのみ、よい教授である。
そのとき、教授は、成熟の段階にあたり、**発達の最近接領域**にある一連の機能を呼び起こし、活動させる。ここに、発達における教授の主要な役割がある。
- ・多くの教育者は、この時期のことを敏感な時期と呼んでいる。
- ・我々は、この時期の特別の感受性の説明を、**発達の最近接領域**の中に見出した。
- ・すべての教科が、常にそれぞれの敏感な時期をもつ。
- ・教授が効果を上げない例：
教授内容が難しすぎる場合、やさしすぎる場合、すでに習得済みの場合。
- ・学齢期における教授と発達の特殊性：それぞれの年齢段階において、
教授は特殊な形式をとり、発達に対して独自の関係をもつ。
- ・書き言葉と文法の例、および、科学的概念の例から得たこと：
 - *学校の基本教科の学習の心理学的側面は、教科全体に共通の一定の基礎である。
 - *学習に積極的に参加する基本的機能は、学年齢の基本的所産（自覚性と随意性）が軸。
これらは、この年齢において形成されるすべての高次精神機能の基本的特徴である。
 - *学齢期は、教授の最適な時期で、自覚的・随意的機能に依拠する教科に敏感な時期。
 - *この教科の教授は、**発達の最近接領域**に存する高次精神機能の発達に最良の条件を保障する。
- ・これらは、基本的問題（学齢期における科学的概念の発達の問題）にも完全に当てはまる。

→★学校教育では、**発達の最近接領域**に基づいて、いつ、誰に、何を教えるかを考えよ、
ということか。35人学級のような集団教育では、自覚的かつ随意的学習の実現には、
かなりの工夫が必要と思われる。

以上